

くまモンを巡るアクセント騒動

崔 文 姫

1. はじめに

読者の方は、本論文のタイトルの一部である「くまモン」をどう発音するだろうか。(東京方言における)「ディズニー」や「リスボン」と同じように最初が高くなるだろうか。それとも「フランス」や「マラソン」のようにいわゆる平板式アクセントになるだろうか。この「くまモン」のアクセントがどうあるべきかが、2014年6月18日放送のテレビ番組『水曜日のダウンタウン』(TBS)で紹介された。問題は、「くまモン」の「く」を高くするアクセントパターンで言うのか、アクセントのないパターン(いわゆる平板式)で言うのかというものである。この問題については、その9カ月前の2013年9月18日にTBSラジオ『安住紳一郎の日曜天国』ですでに取り上げられており、この議論に関してどのような経緯があったかを窺い知ることができる。

本稿はこの「くまモンのアクセント騒動」を取り巻く問題について、言語学(日本語学)・社会学(マスコミ問題)・日本語教育の3つの観点から論じる。言語学的観点からは「くまモン」のアクセントの実態がどうなっているのかを考察する。また「くまモン」のアクセントに関して行った調査も報告する。このアクセント騒動ではマスコミが果たす役割が大きいが、その報道のあり方などについて論じる。最後に、こうしたアクセントの問題が外国人に対する日本語教育について何を示唆するか見ることにする。

2. 言語学的考察

2.1 「くまモン」が提起する問題

「くまモン」のアクセントは「く」にアクセント核がある起伏式か、それとも上がったきり下がらない平板式なのか、それが「くまモン」のアクセントに関わる問題である。目には見えないアクセントを文字で示すのは容易ではないが、本稿ではアクセント核がある直後に「↑」の記号を入れ(例：く↑まモン)、平板式アクセントの場合には語の最後に「→」を入れることと

する（例：くまモン→）。また、そうした記号がない場合は特にアクセントを問題にしていないことを示す（例：くまモン）。ここで注意したいのは、4モーラである「くまモン」に可能なアクセントパターンが実は4通りあることである。すなわち、議論の対象となっている「くゝまモン」と「くまモン→」以外に、「くまゝモン」と「くまモゝン」が理論的な可能性としては存在する（例：「アゝマゾン、ビタゝミン、たくさゝん、サボテン→」）。

本節では「くまモン」のアクセントに関する言語理論的考察を試みる。それにより、「くまモン」のアクセントは「くゝまモン」か「くまモン→」になる可能性が高いことを確認する。別の言い方をすると、「くまモン」を「くまゝモン」や「くまモゝン」と発音する可能性が極めて低いことを見る¹。

まず、起伏式アクセントである場合については、「くまモン」を外來語に準ずる名前（固有名詞）として考える。これは、「明日来る」に由来する社名ASKUL（アゝスクル）、「石橋⇒stone+bridge⇒bridge+stone」に由来するBRIDGESTONE（ブリヂゝストーン）、「鳥井さん⇒さん・鳥井⇒SUNTORY（サゝントリー）」、「味の素」に由来するAJINOMOTO（あじのゝもと）などと同様に、新たに作られた語がアクセントを付与される場合、外來語のアクセント付与規則に準ずると考えられるからである（窪田 2008: 157）。あるいは、「くまモン」を「くま」と「モン」からできた複合語と見なすこともできるので、この場合についても検討する。そして両者の場合において、起伏式アクセントである場合は「くゝまモン」となるのが妥当であることを示す。次に、平板式アクセントについて触れ、その中で「くまモン」が生まれた熊本の方言についても言及する。最後に「くまモン」という語については、起伏式アクセントと平板式アクセントが共存しやすいことを見る。

2.2 起伏式アクセント

2.2.1 アクセントを説明する規則：「-3の規則」と「ラテン語アクセント規則」

「くまモン」を明確な複数の形態素に分解できない1つのまとまった名前と考えた場合、それは「ブリヂストーン」や「味の素」などと同じように（起伏式アクセントの場合は）一定の規則によってアクセントの位置が予測されると考えられる。多くの話者にとって、「くまモン」は「くま」と「モン」が合わさった語であるという意識が高いだろうから、ここで「くまモン」を分解不可能の1形態素と考えることは問題があるかもしれない。実際、次節

1 『水曜日ダウンタウン』において、タレントの松本人志は「くまモゝン」と発音し、笑いを誘っているが、そのアクセントパターンの生起が予測されないことを示している。

でその可能性に触れるが、本節の議論の中心は、のちの議論のために、アクセントが規則によって予測できることを示すことにある。

窪菌 (2006) は名詞のアクセントパターンが基本的に規則に従っており、アクセントの予測可能性が高いことを示している。ここでは「くまモン」のアクセントがどこにあると予測されるか見てみることにしよう。まず、標準語のアクセントは (例外はあるものの) 平板式でない起伏式の場合、「マイナス3の規則」(以降「-3の規則」と記す) に従うものがほとんどであるが、「-3の規則」とは次の通りである。

(1) 起伏式アクセント規則 (標準語の名詞アクセント)

語末から数えて三つ目のモーラを含む音節にアクセントが置かれる。

(窪菌 2006: 20, 34)

この規則は外来語だけでなく和語や漢語を含め、標準語における起伏式の名詞のアクセントの大半を説明できる。「カナダ、バナナ、ポテト、オーストリア、オーストラリア、ワシントン、サッカー、サイダー」などはすべて-3の規則に従っている。

一方で、「カラヤン、トロフィー、インタビュー、パークレー」などは最初のモーラにアクセント核があり、-4あるいは-5になっている。だが、-3の規則に合わないこうした例を見てみると、それらが特定の構造をもっていることを窪菌は指摘する(「ブリジストン」も同様)。そのためには音節が a, ki, zu, pe, syo のような軽音節 (1モーラ音節) であるか、oo, mai, ten のような重音節 (2モーラ音節) であるかを区別する必要がある。「カラヤン」は4モーラだが、ka.ra.yan と3音節であり、軽音節・軽音節・重音節 (L L H) の構造をもち、それは本稿が問題としている「くまモン」と同じである。このL L H (および「インタビュー」などのH L H) の音節構造では、-3の規則に従わない前進型アクセント (例: カラヤン、トロフィー) と従うアクセント型 (例: ビタミン、ピカチュウ) が併存する。窪菌 (2006: 43) は語末が... L L Hとなる場合のアクセントパターンがどのくらいの割合で観察されるかを示している。

(2) ... L L H (L L H と L L L H) のアクセント分布 (網掛け部分にアクセント)

アクセント型 ... L L H ... L L H ... L L H (平板)

生起頻度 14% 75% 11%

(窪菌 2006: 43 表6)

これは、NHK (編) 『日本語発音アクセント辞典』(1985年版) に掲載されている4モーラおよび5モーラの外来語 (計1,100余り) について調べた結果である。また、田中 (2008: 103) は4モーラ語でL L Hの音節構造をもつ外来語139語のアクセント分布を示している。

(3) 4モーラ語L L Hの外来語アクセント分布

アクセント型	L L H	L L H	L L H (平板)
生起頻度	13%	71%	16%

(田中 2008: 103 表 6 を参考)

田中 (2008) は外来語のアクセント核の決定に関しては、モーラに基づいた -3 の規則よりも、音節に基づいた規則のほうが正しい予想ができると述べている。後者の音節に基づいた規則は「ラテン語アクセント規則」と同じであり、語末から2番目の音節(次語末音節と呼ぶ)が重音節(H)ならばその位置にアクセントが付与され、軽音節(L)ならばそのひとつ前の音節、すなわち語末から3つ目の音節にアクセントが付与されるというものである(田中 2008: 83-84)。L L Hの音節構造をもつ語については、-3の規則と「ラテン語アクセント規則」では予測が異なる。前者はL L Hとなることを予測し、後者はL L Hとなることを予測する。田中(2008: 94)は、両者の説明力がどの程度であるかを『日本語発音アクセント辞典』(1985年版)をデータとして比較している。それによると、原理的に予測不能である平板式アクセントをのぞいた場合、4モーラの外来語について、-3の規則は70%、「ラテン語アクセント規則」は80%正しくアクセントの位置を説明すると言う。つまり、モーラではなく音節に基づいた規則のほうがアクセントの位置を正しく予測できることがわかる。したがって、本稿では田中(2008)にならない、音節を基本としたアクセント規則を採用する。

L L Hの音節構造においては次語末音節が軽音節(2番目のL)であるため、「ラテン語アクセント規則」ではその前の音節(1番目のL)にアクセントが付与されることになる。他方、-3の規則では語末から3つ目のモーラである2番目のLにアクセントが付与されることになる(Hが2モーラであるため)。すでに(2)や(3)で示したように、L L HとL L Hの割合を比べると約5対1であり「ラテン語アクセント規則」の説明力がわかるが、ここで注意したいのは「ラテン語アクセント規則」が100%の割合でアクセントを予測することはできないということである(それでも85%について予測できるが)。これについては、外来語の原語との比較をして挿入母音があるかどうかを考慮することで大部分が説明できる。すなわち、1番目のLに挿入母音がある(4c, d)の場合にはL L Hになる割合が高くなる(田中 2008: 105)。

(4) L L Hになる割合(小文字lは原音に母音がなく外来語で母音挿入がある音節を示す)

a. L L H	12%	8 / 67 例中	例: ビタミン
b. L l H	2%	1 / 61 例中	例: サフラン

c.	l L H	80%	8 / 10 例中	例：クレヨン、プレザー
d.	l l H	100%	1 / 1 例中	例：スクリュウ

(田中 2008: 103 表 6 を参考)

参考のために - 3 の規則に従う例を右に添えておく。(4b) の「サフラン saffraan [オランダ語]」は『日本語発音アクセント辞典』(1985 年版および 1998 年版) では「サフーラン、サーフラン」と記載されている。田中 (2008) は複数アクセントをもつ語は除外しているため、厳密には例としてふさわしくないが、参考のために示した。

(4a) と (4c) では 2 番目の音節 L が原語における母音を含む音節に対応するが、このような場合において L L H ではなく L L H のアクセントパターンになることがある (それぞれ 12% と 80%)。ちなみに、4 モーラに限った場合、原語のアクセントが日本語における外来語のアクセントに継承されていると考えると平板アクセントの語をのぞき 85% が正しく説明できると言う (田中 2008: 94 表 2)。しかし、アクセント継承に基づいた分析は語が長くなると説明力が低下するなどの問題点があるため、本稿では採用しない (詳しくは田中 2008 を参照)。なお、(4a-d) に相当する例を右に添えてあるが、(4a, b) については田中 (2008) では示されていないため、該当すると考えられる例を載せてある。(4d) については数字から「スクリュウ」1 語のみが該当すると考えられるが、「ストロー、スプレー」も該当すると思われる²。

田中 (2008: 102) によると、先行研究では L L H が基本的と見なされてきたが、「アマゴゾン→アーマゾン」や「ドラゴゴン→ドゥラゴン」などの通時的変化があること、現在では 7 割以上が L L H となっていることを考慮すると、L L H を基本型と認めてもよいと考えられる。以上から起伏式アクセントの場合、「くまモン」が最も自然であることがわかる。なお、L L H のパターンが多いのは語頭の音節に原語にはない母音を日本語で挿入した場合に多く見られるということ (4c) で見たが (例：クレヨン、プレザー、グラマー、ブラジャー)、「ピカチュウ」のアクセントはこのパターンであり、外来語でない「ピカチュウ」がなぜそのアクセントパターンになるかは理論的に興味深いものとなる。

2.2.2 複合語としての「くまモン」

「くまモン」を 2 つの部分に分けるなら「くま」と「モン」であり、他の可能性は考えられない。この考え方の 1 つとして「くまモン」の語源は「熊

2 田中 (2008) が参照した『日本語発音アクセント辞典』(1985 年版) では「ストロー」・「スプレー」となっているが、同 (1998 年版) では「スプレー」が「スプルー、スプルー」と変化している。

本の者」であるという主張がある（RKK 熊本放送 本田史郎アナウンサー）³。この場合の「モン」は「よそもん（←よそ者）」の「もん」と同じなので「人」を意味することになる。そして、「くまモン」がその短縮形であるなら、一般に短縮形が平板式アクセントになることから、「くまモン」は「くまモン→」と平板式に発音すべきだという主張に繋がる。

上記の「もん」は「者（もの）」が音変化したものであり、「もん」を後部要素とする「～もん」のアクセントパターンは「～者」のそれと同じと考えられる（「物」とも同じ）。「標準語の複合名詞アクセント構造は前部要素のアクセント構造とは関係なく、後部要素によって決まるとされている」ので（窪菌 2006: 27）、「～者」のアクセントパターンがどうなっているかを調べてみた。電子辞書（カシオ EX-word）を使用し、『広辞苑 第六版』で「もの」を逆引き検索し、「～者」に「ネイティブ音声対応」があるものについてそのアクセントパターンを調べた（音声はカシオが独自に作成）。そのうえで、それらの語のアクセントパターンを『NHK 日本語発音アクセント辞典 新版』で確認した（「捕り者」「かぶり者」は「捕り物」「被り物」で代用）。結果として、「～者」のほとんどが平板式アクセントになることがわかった。以下に平板式アクセントパターンとなる語を示す。

(5) 「～者」が平板式アクセントとなる語

- a. 前部要素が2モーラ：えら者、利け者、切れ者（「きれーもの」も可）、曲者、しれ者、ただ者、捕り者（「とりーもの」も可）、何者、賈物、のけ者、馬鹿者、不義者、褒め者（「ほめーもの」「ほめものー」も可）、よそ者、与太者、若者、悪者
- b. 前部要素が3モーラ：暴れ者、あわて者、一刻者（「いっこくものー」も可）、浮気者、おたな者、おどけ者、思い者（「おもいものー」も可）、愚か者、困い者、かぶり者（「かぶりものー」も可）、果報者（「かほうものー」も可）、河原者、変わり者、食わせ者（「くわせものー」も可）、困り者（「こまりものー」も可）、差し出者、さらし者、邪魔者、洒落者、粗忽者、たわけ者（「たわけものー」も可）、調子者、出過ぎ者、道化者、流れ者（「ながれものー」も可）、なぶり者（なぶりものー）も可）、怠け者、ならず者、人気者、日陰者、引かれ者、卑怯者（「ひきょうものー」も可）、独り者（「ひとりものー」も可）、回し者、昔者、無宿者、無法者（「むほうものー」も可）、やくざ者、余計者（「よけーいもの」も可）、律義者（「りちぎものー」も可）、渡り者
- c. 前部要素が4モーラ：愛敬者（「あいきょうものー」も可）、あやかり者

3 熊本県庁チームくまモン（2013: 91-92）においてその主張が明確に述べられている。

(「あやかりもの」も可)、荒くれ者、いたずら者、大立者(「おおだてもの」も可)、臆病者(「おくびょうもの」も可)、お尋ね者、お調子者、気まぐれ者(「きまぐれもの」も可)、しあわせ者、したたか者(「したたかもの」も可)、しっかり者(「しっかりもの」も可)、正直者(「しょうじきもの」も可)、新参者、道楽者(「どうらくもの」も可)、慰み者、働き者、ふつつか者(「ふつつかもの」も可)、厄介者(「やっかいもの」も可)、慮外者、笑われ者

d. 前部要素が5モーラ：成り上がり者

これに対し、平板式アクセントでなく起伏式アクセントになる語は少数であった。

(6) 「～者」が起伏アクセントとなる語

- a. 前部要素が2モーラ：剛の者(「ごうのもの」が主、「ごうのもの」も可)、然る者(「さるもの」)、手の者(「てのもの」)
- b. 前部要素が3モーラ：鳶の者(「とびのもの」)、若い者(「わかもの」)
- c. 前部要素が4モーラ：古強者(ふるつわもの、ふるつわもの)

上で示した(6a)と(6b)の例はすべて「連体修飾+名詞」の語構成であり、さらに(6c)は「ふる+つわもの」であり、構造が(5)とは異なる。したがって、(5)で示したように「～者」という複合語においてはすべて平板式アクセントとなることが確認できる。(5)にはないが、日常的に使用される「嫌われ者、好き者、前科者、ひねくれ者、笑い者」なども平板式アクセントである。「～もん」が「～者」と同様であると仮定するならば、「～もん」のアクセントパターンが平板式になることがここから導かれる。

問題は、「くまモン」を「～者」と意味解釈できるかということにある。あの愛らしいゆるキャラは「熊本の者、熊本に関連づけられる人」なのだろうか(あるいは「物」と考えれば「熊本と関連した物体」なのか)。「くまモン」は動物の熊の姿をしているからこそ「くまモン」であり、馬の姿をしていたならばそれを「くまモン」と呼ぶことに多くの人は違和感を覚えることであろう。「くまモン」は熊のイメージを前面に出して存在し、その背後に熊本がある。「くま」は動物の熊であり、ゆるキャラの名前(の一部)であり、熊本のことでもある。そうした多重構造がご当地キャラクターの特徴なのではないか。それは「ふなっしー」が固有名詞であるだけでなく、「梨(の妖精)」のイメージを喚起し、千葉県船橋市(ふなばしし)を暗示するのと同じである(ただし、ふなっしーは非公認のゆるキャラだが)。したがって、「くまモン」を「熊本の者」と万人が解釈するには無理がある。特に「くまモン」の姿を見て、「くまモン」という名前だと紹介されたとき、何人

の人が「熊本の者」と考えるであろうか。もちろん、そのゆるキャラの名前が「熊本の者」から来ていることを知らされて、その由来に忠実であろうとするならば、その人は「くまモン」を平板式アクセントで発音することだろう。しかしながら、全国規模で人気を博す「くまモン」を愛する多くの小さな子供たちにそうした知識を要求するのはむずかしいのではないか。

その一方で、「くまモン」が「くま」と「モン」が合わさってできたと考えるのは自然である。それでは特に「モン」とは何なのだろうか。人によっては「くまモン」を「くゝまモン」と発音しても「くまモン→」と発音してもそれほど違和感を覚えないが（これについては後述）、それが「ねこモン」だったらどうだろうか（例えば猫田のご当地キャラとして考えてほしい）。「ねゝこモン」でも「ねこモン→」でも容認できるのではないか。それでは「いぬモン」ではどうか。「いぬモン→」という平板式アクセントは自然だが、「いゝぬモン」という起伏式アクセントは不自然ではないだろうか。他の2モーラの動物名で考えてみると、平板式アクセントはよいが最初が高い起伏式アクセント（頭高型アクセント）が不自然なものが見つかる。

(7) a. 頭高型アクセントが自然な動物名

くま、ねこ、やぎ、ろば、さる、りす、かば、わに、かめ、たこ、はと

b. 頭高型アクセントが不自然な動物名

いぬ、うし、うま、ぶた、しか、さば、いか、えび、かに、わし、きじ

両者を区別する特徴は何か。「～モン」の頭高アクセントが自然に感じられる動物名はすべてその語自体が頭高型アクセントであり、不自然に感じられる語はそうではない。すると、「くゝまモン」という起伏式アクセントが「くゝま」という発音と連動している可能性が考えられる。つまり、「くゝまモン」のアクセントの決定に「くゝま」のアクセントが関わっていると考えられる。「くま」の発音を見てみると、歴史的には「くまゝ」であったが、「くゝま」が新しいアクセントパターンとして生まれたようである。1998年発行の『NHK 日本語発音アクセント辞典 新版』を見ると「くまゝ」のみが記されている。『新明解 日本語アクセント辞典』（2001年版および2014年版）を見ると、「くゝま」が「くまゝ」より新しい発音であることがわかる。もし「くまモン」のアクセントが「くま」のアクセントと関連しているとすれば、「くゝま」と発音する人が「くゝまモン」と発音する可能性が高くなると予測できる。そして、それは新しい世代、若い世代に多く観察されることが予想される。つまり、「くゝまモン」と「くまモン→」の発音の違いが世代間に見られることが予測できる。これについて簡単な調査をおこない、その結果を次節に示すことにする。

一人の話者の中で「くまゝ」と「くゝま」の両方のアクセントパターンが

存在することもある。だが、そうした話者でも「くーま」を好む環境があり
 そうで、(童謡あるいは熊本県産のお米である)「森のくまさん」の場合は
 「くーま」が好まれるようである。『新明解 日本語アクセント辞典』の「ア
 クセント習得法則 94」によると、尊敬・愛称・親しみなどをあらわす接尾
 辞は原則としてそれが接続する語のアクセントを生かす傾向があると記さ
 れ、「様、さん、ちゃん、どん」などは「前の語が平板式ならば全体が平板
 式、起伏式ならば前部の語のアクセントを生かす」と書かれている⁴。

「くまさん」を「くーまさん」と「くまーさん」と言うことが可能な話者
 の場合、両者に若干の違いが感じられるかもしれない。「くーまさん」の場
 合は個別性が意識され愛着がやや強く感じられるのに対して、「くまーさん」
 の場合は動物の熊を別の動物から区別する感じで「さん」の機能は丁寧さを
 加えるだけといったものである。例えば「深い森の奥に一匹のくまさんが住
 んでいました」では「くーまさん」が好まれる。これに対して、「うさぎさ
 んは北に行きたいと言いました。ねこさんは南に行きたいと言いました。う
 しさんは東に行きたいと言いました。くまさんは西に行きたいと言いま
 した」では「くまーさん」であってもそれほど違和感はない。個別性が強く感
 じられるのが「くーまさん」であるのは、「くーま」の場合には「くま」が
 固有名詞に近い形で認識されているからではないだろうか。『新明解 日本語
 アクセント辞典』の「アクセント習得法則 23」によれば、擬人名などを含
 む男・女子名のアクセントパターンは2モーラの場合、規則的であり、それ
 はすべて頭高型となるとある(例：あや、もも、ゆき、まお、そら、たく、
 てつ、てる、とら、たま、ぼち)。「くーまさん」において「くーま」の部分
 が頭高型アクセントなのは「くま」が指す動物を擬人化し「くま」を固有名
 詞のように使っているのではないだろうか。(「くまどん」のように親しみを込
 めて呼びかけに使う場合はそれが強く感じられるのではないか。)

したがって、「くまモン」の「モン」は、「者」ではなく、「さん、くん」
 などのような愛称などをあらわす接尾辞に近い要素としてとらえることがで
 きる。日本語には辞書に記載されている「さん、ちゃん、くん、どん」以外
 にも「たん(例：ノンタン)」「ちん(例：ともちん)」「ちよん(例：みっち

4 ここに書かれていないこととして、「さん」が接続する場合の一部において、名前のアクセント
 が保たれずに全体が平板式になることがある。単独では「克也(かーつや)」だが「克也さん」では「か
 ーつやさん」に加え「かつやさん→」も聞かれることがある。これは職名の「先生」についても似
 たような現象が観察されており、「アクセント習得法則 94」では「中川先生」に対する「なかーが
 わせんせい」と「なかがわせんせい」の2つのアクセントパターンを挙げ、「前の語が起伏式な
 らば前の語のアクセントを生かすが、接尾辞が起伏式の場合で慣用のもの一般、及び若い人々の間
 では、接尾辞の高さの切れ目まで高い型で発音する傾向がみられる」と記されている。「くん(君)」
 についても同様の記述がある。

よん)」「ちー(例:りさちー)」「ち(例:なっち)」「っぺ(例:ゆみっぺ)」「やん(例:サブやん)」「ぼん(例:ユキボン)」「ぴょん(例:あべぴょん)」「りん(例:ゆうこりん)」「にゃん(例:あいにゃん)」「みん(例:まいみん)」「ぴー(例:あすぴー)」といった仲間を見つけることができる。これらの多くがNで終わる重音節を成している。また、興味深いことに、これらのいくつかは文末にあらわれる同形の終助詞をもつ(例:嘘びょん、行ったりん)。そして、同じように親しみをあらわす機能をもつ。

「くまモン」の「モン」を「ちゃん」などと同列に論じることが的外でないことは次のエピソードから支持される。2014年3月13日(くまモンの誕生日の翌日)放送されたRKK熊本放送『塚原まきこの福ミミらじお』で、くまモンのサンバイザー(モンバイザー)をつけたパーソナリティーの塚原まきこさんと本田由佳さん(ゆかちん)が「まこモンです」「ゆかモンです」と自己紹介する場面がある(USTREAMで閲覧可)。これは「モン」が「ちん」と同じ機能で使われていることを示す。

「愚か者」において、前部要素「愚か」は修飾要素であり、後部要素「者」は被修飾要素である。一方、すぐ上で示した分析では、「くま」が「くまモン」の中心であり、「モン」は親しみを連想させる接尾辞的要素である。「くま」は「熊」であり、動物の熊を指すとも言えるし、「熊本」から取ったとも言える。しかし、「くまモン」を「熊本者」の短縮語と見なすことはできない。なぜならば、「くまモン」は「熊本の者(くまものもん)」の短縮語であるという言い方にすべての人が納得するわけでないと思われるからである。「デジカメ」が「デジタルカメラ」の短縮語であると言うのは正しいが、社名「カルビー」が「カルシウム・ビタミンB1」の短縮語であると言うのは正しくないというのと通じる部分がある(窪蘭 2008)。前者の「複合語の短縮語は必ず短縮前の複合語形を有しており、たとえばポケモンにはポケットモンスターという長い形が存在する。混成語の場合には、そのような長い形は入力になく、たとえばゴジラに対して『ゴリラくじら』という複合語形はないのである」(窪蘭 2008: 141)。「モン」と結びついた「くま」は擬人化され、固有名詞の特徴を帯び、固有名詞としてのアクセントパターンを示す⁵。こうしてできた「くまモン」は「くまもと」とも4モーラ中の3モーラを共有し、熊本を連想させる。

上で見たように、起伏式アクセントの場合、「くーまモン」というアクセ

5 「とーらモン」は「とら」が平板式アクセントであるにもかかわらず、「うーまモン」ほど不自然ではない。これは「とら」の場合、『男はつらいよ』の主人公である車寅次郎を呼ぶ「寅さん」という固有名詞が存在するからだと考えられる。

ントパターンが最も生じやすい。しかしながら、(インターネットで閲覧可能な)テレビ番組やイベントなどを観察すると、「くまーモン」(や「くまもーン」)のアクセントパターンも皆無ではないと思われる(ただし、そうした話者は複数のアクセントパターンを併用するようである)。そうした特殊とも言えるアクセントパターンが熊本の方言を反映したのか、今後、説明する必要がある⁶。

2.2.3 「くまモン」のアクセントパターン調査

「くまモン」のアクセントは「くーまモン」なのか、それとも「くまモン→」なのか、その実態を把握するため簡単な調査を行った。2014年7月30日から8月29日にかけて、日本語母語話者106名(男性31名・女性75名;10代未満1名・10代46名・20代19名・40代11名・50代20名・60代以上9名)を対象にアクセントパターンを調べた⁷。調査対象者は、数名を除いて全員九州出身者である(熊本出身者が主)。調査の結果、①単語レベルでは、頭高型(「くーまモン」)が93名(88%)、平板式(「くまモン→」)が10名(9%)、その他(「くまーモン」「くまもーン」)が3名(3%)であった。9割近くが「くーまモン」で発音し、平板式は1割程度に過ぎない。なお、平板式で発音する人の内訳を見ると、10代未満1名(その集団の100%)、10代2名(4%)、20代1名(5%)、40代1名(9%)、50代2名(10%)、60代以降3名(33%)となり、若い人よりは年配の人のほうが平板式(「くまモン→」)で発音する傾向があると言えるかもしれない。

また、前節で「くまモン」と「くま」のアクセントパターンに関連があるかもしれないと述べたが、その関連性はなさそうである。「くーまモン」と発音する人(93名)のうち、「くーま」と発音する人は76名(82%)、「くまー」と発音する人は17名(18%)だった。「くまモン→」と平板式で発音する10名のうち、7名(70%)は「くーま」と発音した。ここから、「くまモン」のアクセントパターンの決定に「くま」のアクセントパターンが直接的に関わっているとは考えにくいと結論できる。

②文章レベルの調査(朗読)では、文章に3回あらわれる「くまモン」を、すべて「くーまモン」で発音する人は87名(82%)、すべて「くまモン→」で発音する人は10名(9%)だった。残り9名(8%)は2回を「くーまモン」、1回を「くまモン→」と発音し、個人の中でもゆれがあることが

6 助詞が「くまモン」に接続する場合、東京方言話者であっても「くまーモン」の発音はそれほど不自然ではないと思われる(例:くまモンのほっぺ)。

7 ①単語レベルの調査(くまモンのイラストを見て名前を言う)と②文章レベルの調査(くまモンについて書かれた文章を朗読する)を並行して行った。本調査の詳細(方法や手順など)および年代や性別、方言による分析などについては別稿に譲る。

わかる。さらに、①の単語レベルの調査で「くゝまモン」と発音した人でも②の文章レベルの調査ではすべて「くまモン→」と発音する人がおり、また、その逆のパターンの人もいた。したがって、「くまモン」のアクセントパターンについてはあるパターンで絶対的に発音するように導く仕組みにはなっておらず、いくつかの規則が競合する状況にある可能性が考えられる。そのため、ある話者においてはそうした不安定性が言語活動にあらわれ、ゆれという現象になっていると考えられる。

「くまモン」を平板式アクセントで発音するのは熊本の特徴だという主張があるが、本調査では熊本在住者の8割以上が「くゝまモン」と発音しており、その主張は裏付けられなかった⁸。それよりも興味深いことは、一個人の中におけるゆれが無視できない割合で存在することである。「くまモン」のアクセントパターンを問題にすると、絶対的に頭高型であるべきだ、あるいは平板式であるべきだと言にくいのは、そのアクセントパターンが絶対的に決まらないからであると考えられる。

2.3 平板式アクセント

熊本方言は無アクセントを特徴すると言われ、それが「くまモン」を平板式で発音すべきであるという根拠の一つとなっている⁹。だが、「くまモン」を平板式アクセントで発音するのは熊本出身者に限定されるわけではなく、東京方言の話者であっても「くまモン→」の発音は必ずしも不自然ではない。そこで、本節ではまず東京方言において「くまモン→」の発音がどう位置づけられるかを見ることにする。

2.3.1 東京方言における平板式アクセント

「くまモン」は4モーラ語であるが、『新明解 日本語アクセント辞典』によれば、名詞一般を見た場合、4拍語の中では平板型が最も所属語彙が多く、7割弱を占めるとのことである。また、窪蘭(2006: 64)は3モーラの普通名詞7,937語についてそのアクセントパターンを示している。

(8) 標準語3モーラ名詞の語種別アクセント型の生起頻度

	起伏式	平板式
和語	29% (いのち)	71% (ねずみ)
漢語	49% (普段)	51% (不断)
外来語	93% (ケーキ)	7% (ピアノ)

(窪蘭 2006: 64 表 12)

8 これについては地域ごとの大規模な調査が必要であろう。

9 RKK 熊本放送アナウンサー本田史郎「よそもん、ポケモン、くまモン」<http://rkk.jp/anaroom/archives/cat543/>

そして、モーラ数とアクセントパターンは次の通りである。

(9) 和語・漢語と外来語のモーラ別平板率

	3モーラ	4モーラ	5モーラ	平均
和語+漢語	53%	66%	30%	54%
外来語	5%	19%	8%	13%

(窪園 2006: 65 表 13)

田中 (2008: 215) が示すように、日本語の名詞を見ると、3モーラ語と4モーラ語を合わせると全体の6割強を占める(3モーラが2割、4モーラが4割)。これに対し、5モーラは16%、6モーラは11%、2モーラは5%であり、歴然とした差が存在する。それぞれにおいて、平板率がどの程度の割合であるかを示したものが次である。

(10) 名詞モーラ数別の平板率

a. 4モーラ語	:	74.0% (16694 / 22574)
b. 3モーラ語	:	51.5% (6468 / 12550)
a + b	:	65.9% (23162 / 35124)
c. 5モーラ語	:	27.9% (2523 / 9039)
d. 6モーラ語	:	20.9% (1284 / 6150)
e. 2モーラ語	:	16.9% (509 / 3020)
f. その他	:	9.9% (345 / 3479)

(田中 2008: 216)

以上のことから、全体に対する所属数の多いモーラの語ほど平板率が高いことがわかる。アクセントの機能は、語内の音声的な部分的際立ち(頂点)を示し、まとまりを示すことによって語・接辞・形態素などの境界を示すことにある(田中 2008)。多くの語彙において、語の存在を示すためのアクセントが欠落しているということは一見したところ矛盾したように見えるが、田中(2008: 216)が指摘するように、4モーラ(準じて3モーラ)は日本語の語彙の多くを占めるため、その単語長の情報だけで語であることを認識できるのである。そのため、わざわざアクセントという手段を使う必要がないのである。換言すると、典型的なモーラ数の語の場合、その長さが語を示すのに十分な情報として機能するために、アクセントを使う必要がないのである。また、田中(2008: 217)は親密度や使用頻度の高さがアクセントを消失させる傾向について言及しているが、これを考慮すると、複合名詞の短縮語が4モーラに収束し、平板式アクセントになることが多いのは納得できる¹⁰。

10 ただし、すべてではない: 「いとつちゅー」(←伊藤忠商事)、「たまつしん」(←多摩信用金庫、

したがって、4モーラである「くまモン」が平板式アクセントで発音されるとしてもそれほど驚くことではない。

そうではあるが、すでに2.2.1節で触れたように、4モーラであってもその音節構造は異なる場合があるので(HH、LLH、LHL、HLL、LLLLの5種類)、より詳細な考察が必要である。特殊モーラを含まない典型的な和語の型に近いLLLL型(例:アラスカ)は、「くまモン」のLLH型とは平板率が異なる。田中(2008: 224-225)の外来語のデータによると、前者は平板率が46%(98/211)で、後者は14%(22/155)である(窪蘭2006: 71ではLLLL型は54%、LLH型は19%)。したがって、4モーラであるからといって一概に平板式が多いというわけではない¹¹。

また、LLHの音節構造をもつ4モーラ語であれば、同様のアクセントパターンをもつかは不明である。最終重音節Hにある特殊モーラは、二重母音第2要素 /J/ (例: たいかい) と長音 /R/ (例: ときよ) という母音になる可能性と撥音 /N/ (例: さんしん) という共鳴子音になる可能性があるが、促音 /Q/ (例: コックピット) になることはない(例は田中2008: 5より)。儀利古(2011: 15)は、田中(2008)に言及し、田中が「LLH構造であっても全く平板型アクセントが生起しないわけではなく、その生起頻度は語末特殊拍の種類によって異なると主張した上で、語末特殊拍が /N/ である場合には /R/ である場合と比較して平板型アクセント生起頻度が高いことを指摘している」と述べている¹²。儀利古(2011)は、東京方言におけるアクセントの平板化現象に関する研究であるが、外来語の複合名詞について実証的・統計的に調査をおこなっている。儀利古は、若年グループとその親世代グループの2つのグループに分けて調査をしているが、その結果、わかったことは ①複合語の後部要素が3モーラ語あるいはLLの2モーラ語の場合、平板式アクセントは生起しない(例:ペルーバナナ、ブラジルハム) ②後部要素が特殊モーラを含む場合、その種類がアクセントパターンに決定的な影響を及ぼす(例:シカゴティーよりもシカゴパンのほうが平板化しやすい) ③若年グループにおいても後部要素が撥音で終わる場合にのみ平板化が起こる。ここでは②と③が議論に関連する。親世代グループ(43~52歳の10名)では、複合語後部要素の語末が長音である場合の平板化率は0%、撥音の場合はわずか0.3%であった。他方、若年グループ(23~34歳の32

玉島信用金庫)、「リアーじゅう」(←リアルの生活が充実している人)、「おなちゅう」(←同じ中学校の出身者)。

11 なお、LLLL型において語頭にアクセントが来る理由、4モーラ以下と5モーラ以上のアクセント付与の違いについては田中2008を参照のこと。

12 ただし、残念ながら、田中(2008)に該当する箇所を見つけることはできなかった。

名)では、長音の場合は0%だが、撥音の場合は14.2%だった。長音の場合、2グループに大きな違いはないが、起伏式の場合、親世代グループは後部要素のアクセントを保存するパターンを好むが(例:カナダパホン;パホン)、若年層は複合語としてのアクセントパターンを好むことがわかった(例:カナダパホン)。ここから、若年層が個別な情報よりも一般的な規則を好むことがうかがえる。また、撥音の場合、平板式アクセントを好むかに関して、若年グループと親世代グループに大きな違いが示されたことは重要である。従来、複合名詞のアクセント規則とされていたものが変容し、(語末が撥音である)複合名詞は平板式アクセントにする割合が高まっているとも考えられる。外来語において4モーラ語は平板式アクセントで発音されやすいがLLH型は例外であると言われてきたが、儀利古(2011)の研究はLLH型の内部構造を見る必要があることを示したという点で有意義である。儀利古は外来語複合名詞のアクセントは外来語単純名詞のアクセントと同列に論じることができることと次の例を提示する。

(11) 4モーラ外来語における語末特殊拍の種類とアクセント

- a. エナジー、ピクチャー、タクシー、シナジー、レクチャー、ポスター
- b. ギロチン、オルガン、パチカン、ペリカン、マネキン、マラソン

(儀利古 2011: 15)

(11a)は語末が長音だが起伏式アクセントで発音する。(11b)は語末が撥音だが平板式アクセントで発音する¹³。これは外来語複合名詞と同じであるので、単純名詞・複合名詞を含めた一般的な分析が可能であり必要であると儀利古は考える。

単純語・複合語の違い、語種の違い、品詞の違いなどはあるものの、その背後には一般的なアクセント付与規則が存在すると考えられる(窪蘭 2006など)。そうであれば、上で示した儀利古(2011)の成果は「くまモン」のアクセントと無関係ではない。すなわち、「くまモン」は撥音で終わるので長音で終わる語よりも平板式アクセントで発音しやすいかもしれない。ただし、個別の形態情報も強く関与すると思われる。例えば「マヨラー、アムラー、シノラー」など「ラー」で終わる場合は(長音だが)平板式アクセントで発音される。また、撥音の場合でもその前の母音の種類が関わっている可能性があり、儀利古(2006)は/...CiN/の場合が突出して平板式で発音されることを示している。他方、/...CaN/、/...CeN/、/...CoN/では起伏式アクセントの生起頻度が高く、/...CuN/はその中間に位置する。それが正しければ、「くまモン」は容易に平板式アクセントで発音されることはないということ

13 儀利古はアクセント情報および原語も(11)に記載している。

になる。特撮ものに出る怪獣の名前に「ドン」で終わるものが多いが、起伏式アクセントで発音されるものがほとんどと言えそうである¹⁴。「ガヴァドン、テレスドン、パンドン、バードン、ザルドン、エレドン、ゲドン、ネガドン」など怪獣の名前は起伏式アクセントで発音される。これには「ドン」で終わる怪獣の名前は起伏式であるという知識が働いているようである。注14のサイトによると、「ラドン」が1956年に登場したそうだが、それを始めとして起伏式アクセントの「～ドン」が続くことで、怪獣名の「～ドン」は起伏式アクセントという規則が話者の中に確立したのではないか。また、「ザルドン」などは平板式アクセントで発音すると「かつ丼」のような食べ物と連想させるので、同一音素との混同を避けるためにアクセントを変えるという方策を取っている一面もあるかもしれない。

以上、4モーラ語「くまモン」が平板式アクセントで発音される要因としてはそれが撥音で終わることがあるかもしれないが、その前の母音が何であるかにも左右されそうなのでさらなる研究が必要である。それ以外の可能性としては「～モン」で終わる平板式アクセントの語があり、それが影響を与え、「くまモン」を平板式アクセントで発音させる可能性もある。これとは逆に、「ガウラモン、ピーグモン」などの怪獣名と結びつけ「くまモン」と発音すべきと言う者が存在するのは事実である。

馴染み度が高くなるとアクセントが平板化するという考え方があり、若い層が平板式アクセントを多用するというのは事実である。若者を中心に「モデル」「ファイル」「ネット」「サーファー」「図書館」「ライン」などは平板式アクセントで発音され、それは3モーラ語・4モーラ語に限られず、「バグ」「マジ（←真面目）」「ウィンドウズ」なども平板式アクセントの発音が広まっている¹⁵。馴染み度が高くなることが起伏式アクセントの語を平板式アクセントに変えるということで「ピアノ」などの語は説明できそうだが、「くまモン」の場合は元々「くまモン」だった発音が「くまモン→」に移行しつつあるというわけではないので、ある話者においては新語は平板式アクセントで発音するといった傾向があるのかもしれない。その一方で、周りからの影響で自分の発音を変えることもあることは指摘しておく¹⁶。したがって、マスコミなどの影響で発音が変わることは絶対にないとは言い切れない。

14 小野瀬雅生オフィシャルブログ『世界の涯で天井を食らうの逆襲』『名前前にドンが付く怪獣』を参考にさせていただいた：<http://ameblo.jp/onose-masao/entry-11584664981.html>

15 理由としては、集団内での日常化、意味の差別化、発音の省エネなどが考えられる。

16 埼玉県の大学に勤務する大学教員はそもそも「くまモン」と発音していたが、学生たちが「くまモン→」と発音するため、自分の発音を意識的に変えたそうである。

2.3.2 熊本方言

日本語は高低アクセントが特徴であるが、方言によってはそうした特徴をもたないことがある。「くまモン」が生まれた熊本県の一部でも東京方言のようなアクセントをもたない方言があることが知られており、「くまモン」を「くまモン→」と発音すべきだという根拠として「熊本は全国でも名高い(?)『平板アクセント地帯』というお国の事情」だからというものがある¹⁷。また、公式にくまモンもそのアクセントを認めているという報道があり¹⁸、当のくまモンは2012年1月、ツイッター(旧アカウント)で、「熊本弁らしく抑揚なしで平べったくがいかモン」とつぶやいたと伝えられている。TBSラジオ『安住紳一郎の日曜天国』(2013年9月18日)でも以下のように語られている。

- (12) 熊本県っていうのは熊本弁が非常に方言が抑揚がなくて元々平板化を好む県で非常にそういう、特に年配の人からの平板化希望が強いんですね。お年寄りの方から「いや熊本もんだから『くまモン→』だろう」っていうそういう声があるんですけど、地元の新聞なんかの投書などが相次ぎまして。

ここから、「くまモン」を平板式アクセントで発音すべきであるという主張は熊本県の一部において「くまモン→」というのが普通であるからという理屈であることがわかる¹⁹。

一方で、東京方言であっても「くまもん→」と平板式アクセントで発音することがあるが、それと熊本方言は別に扱うべきと思われる。(12)にあるように、熊本方言の場合は「くまもん」の平板式アクセントは年配者に多く見られるという指摘があるが、「くまモン→」と発音する人は必ずしも年配であるわけでもない(2.2.3節を参照)²⁰。東京方言にはその方言内において平板化を促進する何らかの要因が存在すると考えられるが、それは熊本方言における無アクセントの現象とは必ずしも結びついているとは思えない。熊本方言と東京方言の両方に見られる平板式アクセントの関連性については今後

17 本田史郎「よそもん、ポケモン、くまモン」『RKK アナウンサールーム』<http://rkk.jp/anaroom/archives/2013/05/post-282.html>

18 隅川俊彦「くまモン、どう発音? 在熊テレビ局違うモン『く』にアクセント 抑揚ない熊本弁」熊本日日新聞社 2013年4月28日朝刊。

19 「デコボン」も熊本県では一般に「デコボン→」と発音するが、東京方言では「デコボン」と発音する話者が多いことと同様である。

20 本稿では示さなかったが、朗読文書による調査の結果では、熊本方言話者ではない人(例えば、宮崎方言話者)が、「くまモン→」と平板式で発音している。したがって、「くまモン→」と発音する人は必ずしも熊本方言話者に限定されない。

の研究が必要であろう²¹。

今後、「くまモン」の平板式アクセントは広まるのであろうか。「くまモン」のアクセントについて紹介した『水曜日のダウンタウン』の中で齋藤孝明治大学教授は次のように述べている。

- (13) 可能性として、若い人たちがくまモンからくまモン→って平板化していき、くってことはあるんじゃないかと思いますね。若い人たち、今ドラマのことをドラマ→って言ったり、カレシだったのがカレシ→って言うようになってるんですね。言葉はその言葉使いに慣れてくると、段々こうアクセントを平板にしても伝わるようになってくるので、まあ若い人を中心にですね、「実はそんなに興奮してないよ」という風な表現として平板なアクセントがいま好まれてきていると。たぶんあと3年も経つと、くまモン→っていう人が気がつくとも増えていることもあるんじゃないでしょうか。

これは熊本県において「くまもん」を平板式アクセントで発音する人は年配者が多いのではないかということと容易に相容れるものではない。東京方言において特に若年層が平板式アクセントを多用し、従来起伏式アクセントであったものが平板式アクセントに変わりつつあることはよく知られているが、「くまモン」という固有名詞が3年間という短期間で平板化するかは疑問である。「富士山(ふじさん)」「ピカチュウ」「ピークミン」は「くまモン」より古い語だが、アクセントが平板化しているという現象はないと思われる。

2.4 一個人におけるゆれ

「くまモン」をどのように発音するかについては、地域や人(世代)によって異なるということは認識されていると言えそうだが、その反面、一個人において「くまモン」が常に一定のアクセントパターンで発音されているかはほとんど議論されることはない。一般に、個人の言語活動は一定の基準に従ってなされると言えるが、「くまモン」の発音については一個人の中でも「ゆれ」が見られる。

例えば、2014年7月4日放送の『ワールドビジネスサテライト』(テレビ東京)の「トレンドたまご」というコーナーで光るバルーンが紹介されたが、その中で相内優香アナウンサーは「くまモン」を異なったアクセントパターンで発音した。すなわち、「暗闇にくまモンが浮かび上がりました」では「くまモン」と発音し、「現在はくまモンの使用許可を取得…」では「くまもん→」と発音した。ネットにおいても同様の資料が見つかり、これ

21 熊本市におけるアクセントパターンのゆれについては坂口2001などを参照。

らのことから（ある話者においては）「くまモン」のアクセントパターンが唯一的に決まらないことがわかる。

2.2.3 節ですでに示した通り、本稿の調査の結果においても、「くまモン」のアクセントについては個人のなかでもゆれが観察され、今後更なる調査が必要であると考ええる。

2.5 まとめ

本稿は「くまモン」のアクセントが起伏式アクセントであるべき根拠とされている主張のいくつかを（積極的に）採用しない。まず、「くまモン」は「熊本者（くまもともん）」の短縮語だという説があるが、多くの話者にとって「くまモン」は「熊本者」（あるいは熊本）と直接的に関連づけられているとは考えにくいので、その説は疑わしいと考える。また同時に短縮語なので平板式アクセントだという説も取らない（すでに指摘したようにそうでない例もある）。ただし、「くまモン」を「熊本者」の短縮語と考えること自体は否定しない。そうではあるが、そうした話者は、熊の姿をしたゆるキャラを「人（者）」と結びつけて意味解釈するため、やや特殊な比喩的解釈が必要となる。

その一方、熊本方言が無アクセントを基本とするので、熊本生まれの「くまモン」は平板式アクセントであるべきだという主張は主張としては間違っていない。しかし、最終的にどのアクセントを採用するかは全国各地の日本語話者に委ねてよいのではないだろうか²²。それ以上に注意すべきは、東京方言であっても「くまモン」の平板式アクセントが生起していることであり、それは東京方言のアクセント研究において解明すべきことである。

本稿は東京方言における「くまモン」の平板式アクセントを以下のように説明する。「くまモン」は「くま」と「モン」に分解できるが、前者は名前（固有名詞）であり、後者は「さん」と同等の接尾辞であると主張する。これは「まこモン」「ゆかモン」などと自分の名前を使い自己紹介する実例があったことから裏づけられる。「くま」は2モーラの固有名詞なので「くま」の発音が名前らしく聞こえ、結果として「くまモン」が生起することが予測される。

「くまモン」が平板式アクセントで発音されるのは、それを促進するような要因があるからだろうが、すぐあとで述べるように、それには少なくとも2つの要因が考えられる²³。しかし、そうした要因は平板式アクセントを絶対的に強いるほど強いものではなく、多くの東京方言の話者にとって、起伏式

22 「デコボン」についても同様の議論が成り立つ。

23 その2つの両方をもつ話者は平板式アクセントで発音する割合がより高くなると予測される。

アクセントを規定するアクセント付与規則と競合し、一話者の中において起伏式アクセントと平板式アクセントが共存することが多いと考えられる。1つ目の要因は、「～モン」という名前を「～」のアクセントに関係なく平板式アクセントで発音してよいという知識をもつ場合である。こうしたアクセント知識は経験に基づき形成されるもので、どのような語彙と接したかが異なるため個人差が予測される。例えば、「ポケモン→」を固有名詞のような語として認識する話者にとって「くまモン→」はそれに準じたアクセントとなるため、「くまモン」を平板式アクセントで発音したとしても許容されやすくなる²⁴。この要因は形態素「モン」に関する知識だが、敬称「さん」などに関する知識がどうなっているかは下で触れることとする。2つ目の要因は、現代日本語を特徴づけるようになってきている（特に4モーラ語あるいは3モーラ語の）平板式アクセントの波が新語である「くまモン」にも及んだというものである。これは起伏式アクセントだった「くまモン」が平板化するというよりも新しい語彙である「くまモン」を平板式アクセントで語彙登録する場合もあるし、元々は起伏式アクセントだったが周りの話者の影響を受けて平板化する場合もあるだろう。日本語の名詞においては4モーラ語（および3モーラ語）が主で、その長さだけで語であることがわかることが多いため、そうした場合にはアクセントをつける必要がないことはすでに述べたが、それは省エネルギーにもなることが関係しているかもしれない。

「モン」に関する知識が（一部の話者において）どのようになっているかをそれに類する「さん」などと比較しながら考えてみよう。「さん」はその前の名前のアクセントを生かすことが原則だが、すでに指摘したように「や」で終わる3モーラの男性の名前ではそれが起伏式アクセントであるにもかかわらず平板式アクセントで「～さん」と発音することが一部話者で可能になっているようである（例：克也さん、裕也さん）。また、「～ちゃん」についても、「さん」と同じように、「～」が2モーラの場合は第1モーラにアクセントが付されるのが通例であるが、「うっちゃん」（ウッチャンナンチャンの内村光良）、「まっちゃん」（ダウンタウンの松本人志あるいは松村邦洋）、「てっちゃん」（出川哲朗）などの（男性お笑いタレントの）場合はそうした決まりに従わない（東京ではない方言の可能性もあるが東京方言話者はそれを取り入れている）。この場合、「ちゃん」の前が促音であるといった共通性をもっている²⁵。これは、従来の規則の一部が例外的に破られることでそれが

24 「ポケモン（ポケットモンスター）」は正確には架空の生物に対する総称であり固有名詞ではない。だが、ピカチュウのことをポケモンと呼ぶ人がいるのも事実である。

25 鉄道ファンの「てっちゃん→、みっちゃん→」はまた異なった用法だが平板式アクセントである：「さん」の場合は「ぐっさん→」（←山口智充）。

新たな規則を作り出していることを示すものと考えられる。いわゆる「ら抜き動詞」も一気に「ら抜き」になったのではなく最初は不規則動詞においてその先駆者があったことが知られており（井上 1998）、一部の特殊なものから規則的なものへ発展したことを見るができる。同様に「マヨラー（マヨネーズ愛好者）」の形態素「ラー」も元々は英語の *teacher* などの *-er* に通じるもので最初は「シャネラー」「グッチャー」「アムラー」などで使われることでそこから「ラー」が独立したものである。このように、具体的な例を基に言語の規則は形成されると仮定することができるが、そうした規則の確立は新たな語彙の導入にも影響を及ぼすと考えられる²⁶。元フジテレビアナウンサー千野志麻は愛称が「チノパン→」だったが、これは同名の番組の司会者だったことから来ている。だが、それは「チノパンツ」とかけており同じ平板式アクセントである。面白いのは、この後のアナウンサーの愛称が同じアクセントパターンで「アヤパン→」（高島彩）、「ショーパン→」（生野陽子）、「カトパン→」（加藤綾子）、「ミオパン→」（松村未央）、「ミタパン→」（三田友梨佳）と平板式に発音されたことである。これは1つの例が他のアクセントパターンに影響を与えた事例と考えることができる。

1つの例から一般化がおこなわれるということはありませんかと思うかもしれませんが、「くまモン」を基に「まこモン」「ゆかモン」と発話したのは「くまモン」を「[名前] + モン」と分析したからに他ならない（だが、すべての言語現象が1つの例から一般化されると本稿は主張するわけではない）。

「くまモン」をどう発音するかについては、その話者の既存の言語知識の中に「くまモン」に類した「～モン」が存在すると、その属性が「くまモン」まで引き継がれることが十分にあり得ると本稿は考える。例えば、「フジモン→」（←お笑いタレントの藤本敏史）が「くまモン」と共通性を有していると分析すれば、「くまモン→」になる可能性が高くなると考える（ただし、そこには「くまモンだモン!!」にも感じられる可愛さはないと想像できる）。あるいは、「くまモン」を「ポケモン→」と結びつけた場合は創作されたキャラクターの名前に「モン」が使われると分析されることになる²⁷。

そうした前提となる言語知識がなく「くまモン」を平板式アクセントで発音する可能性として、東京方言における4モーラ語の平板化アクセントの広がりにも触れた。これもある意味、既存の言語知識に基づくことであり、（マ

26 基本的には確立された規則に合うように辞書に加えられる。そうでない場合はそれが新たな規則の確立に繋がることもある。

27 ちなみにフジモンの配偶者の木下優樹菜は「ユッキーナ」と呼ばれ、それは「アッキーナ」（←南明奈）と同じような愛称だが、「アッキーナ、ユッキーナ」に真似て「モッキーナ」（←元木大介）という呼び名も誕生した。

スコミなどから入る)新語は平板式アクセントが多いということが考えられる。これと関連して、言語は他者とのコミュニケーションに利用されるものでもあるから、周りの人が平板式アクセントで「くまモン→」と発音している場合、それに倣うことも大いにあり得る。

以上、「くまモン」のアクセントを巡る問題点を見たが、そこには様々な要素が絡んでいることがわかった。今後、「くまモン」のアクセントがどうなるか確固たる予測はできないが、上で触れたように、周りの人たちが「くまモン」をどのように発音するかということも無視できない要因となる。その点において、テレビを中心としたマスコミの影響は大きいと考えられるが、次節では今回の「くまモン」のアクセントに関する報道について考察を加えることとする。

3. 社会学的考察

本稿の著者が「くまモン」のアクセントに関する問題を知ったのは2014年6月18日に放送されたTBSテレビ番組『水曜日のダウンタウン』である。そうしたバラエティ番組の中で言語のアクセントという問題が全国的に取り上げられたのは興味深いのが、わずか11分半程度のトピックだったのでやや消化不良と言える部分もある。「くまモン」のアクセントについては同じ系列であるTBSラジオ『安住紳一郎の日曜天国』(2013年9月18日放送)でもすでに取り上げられていたので、その次に見ることとする。

3.1 『水曜日のダウンタウン』(2014年6月18日放送)

この番組ではまずプレゼンターのカンニング竹山が出演者の松本人志などに「くまモン」のイラストを見せて何と呼ぶか尋ねることから始まる。出演者たちは「くまモン」と起伏式アクセントで発音するが、その直後、TBSアナウンサー3人に尋ねると「くまモン→」と平板式アクセントで発音する。ここから、なぜTBSアナウンサーは平板式アクセントで発音するかが問題となり、TBSでは「くまモン→」と平板式アクセントで発音することが決まっていることが伝えられる。そして、それが熊本放送RKKから「くまモン→」に統一したいという連絡があったことが明らかになる。映像では『『くまモン』アクセントについてのお願い』というタイトルでJNN・JRN各局アナウンス責任者宛てのRKK報道制作局放送部長 本田史郎氏による文書がアップになる。日付は2013年5月14日である。そして、RKKの2013年の流行語大賞のニュース映像が紹介され、イベントの司会者は起伏式アクセントで発音するがRKKのアナウンサーは平板式アクセントで発音している。そして、さらに実は「くまモン」の発音で熊本が割れていることが紹介される(頭高型と平板型として説明)。

このきっかけは熊本出身の森高千里が歌う「くまモンもん」であり、ここでは「くゝまモン」と起伏式アクセントで歌われている。この歌がテレビで放送されると、熊本県民から発音がおかしいのではないかという声が寄せられたという。そして、熊本弁は抑揚のない発音であり、「くまモン→」と発音する人が多いとの解説が入る。そうした中、TBS系列熊本放送（RKK）が「くまモン→」と平板式アクセントで統一する方針を出したことが紹介され、RKK 熊本放送の本田史郎アナウンサーによる説明が始まる。本田氏の話は次の通りである。RKK アナウンサーは元々「くまモン→」と平板式アクセントで発音していた。「くまモン」が全国的に有名になると、アナウンサーやタレントが「くゝまモン」と起伏式アクセントで発音することが多いことに気づいた。そこで「くまモン」は平板で発音すべきだという理論武装をした。その根拠は3つあり、1つは「くまモン」は「熊本の者」に由来するというので、2つ目は熊本方言にアクセントがないということであるが、その途中でビデオ映像が故意に切られる（時間の関係と思われる）。その後、RKK がそうした理由で全国にお願いしたことが伝えられる。

続いて、熊本県内の他の放送局も見解を打ち出し、県内は真つ二つに割れる。日本テレビ系列 KKT（くまもと県民テレビ）とテレビ朝日系列 KAB（熊本朝日放送）は起伏式アクセント、RKK とフジテレビ系列 TKU（テレビくまもと）は平板式アクセントを主張し、「熊本発音戦争」が勃発した。そして、NHK 熊本放送の方針が発表された。「国営放送」NHK が決めた発音は「くゝまモン」と起伏式アクセントだった。NHK の加勢により、起伏式アクセントの勝利かと思われたが、「くまモン」本人が公式ツイッターで「熊本弁らしく抑揚なしで平べったくがいいかモン」と発表し、発音戦争は泥沼状態になる。

その後、スタジオで出演者によるトークが始まり、「くまモン→」だと「ばかもん、にせもん」に通じる感じがあるだとか、「くゝまモン」だと可愛い感じが出るだといった意見が聞かれる。さらにスタジオは日本語の方言に話が及ぶ。そして、今後どうなっていくかということで、日本語のプロの齋藤孝明治大学文学部教授に意見を求める。それによると、若い人たちが「くゝまモン」から「くまモン→」に平板化していく可能性があり、あと3年もすると、平板式アクセントが増えているということである（2.3.2 節参照）。再び、スタジオに戻り、TBS 系列では今後も「くまモン→」と平板式アクセントで統一していく方針であることでこのコーナーは終了する。

バラエティ番組の1コーナーで日本語のアクセント問題を取り上げたことはとても興味深いことと言えよう。そして、短時間の中でその問題と経緯を手短にまとめ、方言によるアクセントの違いやアクセントの違いによる二

ュアンスの違いを取り上げたのは面白い。しかし、時間の制約ゆえにさらに興味深い事実が伝えられていないので、それについては次節で取り上げる。また、「くまモン」の今後の発音について意見が出されているが、それについてもさらに検討する余地がある²⁸。

3.2 『安住紳一郎の日曜天国』（2013年9月18日放送）

前節で紹介したテレビ番組の半年以上前に、「くまモン」の発音に関することがTBSラジオで取り上げられていた。2013年9月18日放送の『安住紳一郎の日曜天国』において、安住アナウンサーはTBSでは月に一度ほど、言葉の使い方や発音に関する委員会があり、変化していく日本語に対応しているということに触れている。その委員会に仕事のために長いこと出席できなかった安住アナウンサーが議事録や同僚のノートを見て勉強した中で、「くまモン」のアクセント問題があることが紹介される。

2011年3月に九州新幹線全線開通を記念して熊本県のキャラクターである「くまモン」が大人気であることが紹介され、視聴者が「くまモン」をどう発音するか問いかける（安住アナウンサー自身は当初「くまモン」と起伏式アクセント）。ところが「くまモン」は平板式アクセントで発音すべきという声が上がリ、それについては前節で触れた通りである。前節のテレビ番組であまり触れていなかった点は、「くまモン」の平板式アクセントを好むのは年配の人に多いということであり、RKKとTKUが主張する平板式アクセントとKABとKKTが主張する起伏式アクセントの背後に世代間抗争があるということである。そして、前者の2つの放送局はいわゆる老舗で（RKKは昭和28年に開局、TKUは昭和44年に開局）、後者が新規に参入した放送局であることが紹介される（KABは平成に入り開局、KKTは昭和57年に開局）。さらに、前者と後者では各局の構成員（従業員）の年齢が違うのではないかと推測し（前者は後者よりも高い）、世代による発音の違いが方針に反映されているのではないかと安住アナウンサーは想像する。

伝統派は平板式アクセントを支持し、新興勢力は起伏式アクセントを支持する（と安住アナウンサーが想像する）中、「くまモン」を創った水野学氏が起伏式アクセントで発音することが紹介される（『熊本日日新聞』に拠ると言及）。その一方で、前節で紹介したとおり、くまモンのツイッターに触れ、決着がつかない状態が続く²⁹。そして、保守的なNHKの方針が待たれる

28 一つ問題があるとすれば、それはNHKを「国営放送」と紹介した箇所である。「公共放送」と言うのが正しいと考えられるが、意図的に「国営放送」と言ったのであれば、それはある種の意見表明である。

29 熊本県熊本ブランド推進委員会は「県民の皆さんが呼びやすい方で呼んで下さい」と声明を出した。

が、NHKは起伏式アクセントを選ぶ。そうした混沌として状況の中、RKK（TBS系列）の本田アナウンス部長がTBSアナウンサーの一人ひとりに依頼状を送ってきたことが紹介される。

前節のテレビ番組で伝えていなかったのは、（安住アナウンサーの想像の域を出ないが）アクセントの違いが話者の年代と関連しているのではないかということである。年配の人たちは平板式アクセントを好み、若い人たちは起伏式アクセントを好むということである。これは一般的に考えて大いにありえることだろう。伝統的な方言はさまざまな要因によって姿を変えつつあり、方言がもっていた特徴は変化しつつあり、場合によっては消滅しつつある。平板式アクセントを好む熊本方言が年配の層において保たれ、若い層においてはそれほど保たれていない可能性は十分にあり得る。このことが「くまモン」の発音と関係しているのであれば、上の世代が平板式アクセントを好み、若い世代が起伏式アクセントを好むことは自然に説明できる。すると、今後、若い人たちの間で平板式アクセントが増えるというテレビ番組内での予測には何か説明が必要となる。3年という時間を指定しているのも、もし調査などをきちんとしておけば、その説が正しいか実証できるだろう。

3.3 補足と考察

『熊本日日新聞』は2013年4月28日朝刊に「くまモン、どう発音？ 在熊テレビ局違うモン『く』にアクセント 抑揚ない熊本弁」という記事を掲載している（「熊日データベースサービス」より）。

- (14) 「くまモン」は、「く」にアクセントを付けるのか、抑揚を付けずに読むのか。県PRキャラクターくまモンをどう発音するか、テレビ局の対応が分かれている。在熊5局に見解を求めると、それぞれに深い理由があった。くまモンの発音をめぐるのは2011年、在熊のアナウンサーの間で議論が白熱。意見が分かれ、その結果が“勢力図”に反映されているという。「く」にアクセントを付けるのはNHK、KKT、KABの3局。抑揚を付けず、アナウンス用語でいう「平板」で読むのはRKK、TKUの2局だ。NHK熊本放送局は「取材先で『く』にアクセントを付ける人が多く、局内で検討した結果」。KKTは、似た発音のキャラクターとしてウルトラマンに登場する「ビグモン」などを挙げ、「聞き取りやすさを考え、アクセントを付けるのが自然」と説明する。KABの船津真弓アナウンサーは3月末、くまモンをデザインし、名付け親でもあるアートディレクター水野学さん（東京都）に取材。「『く』にアクセントがあるつもりで名付けた」と聞き、船津さんは「一つの答えが得られて安心した」と振り返る。一方、平板に読むRKKは、くまモンの語源が「くまもとんもん（熊本の者）」である点を重視。本田史郎放送部長は「短縮した言葉は平板に読む

のが原則」「よそもん、地のもんに類する発音」と分類している。TKUも同様の意見。「フジテレビ系列の全国会議で話題になり、系列局からの問い合わせも多い」という。「熊本弁は固有名詞を平板に読む傾向があり、くまモンも平板が自然」との見解だ。

くまモンをめぐる二つの読み方。県ブランド推進課は「県民のみなさんが呼びやすい方で発音していただければ」との立場。当のくまモンは昨年1月、ツイッター（旧アカウント）で、こうつぶやいている。「熊本弁らしく抑揚なしで平べったくがいいかモン」

（隅川俊彦）

(14) を読んでわかるように、「くまモン」の発音を巡る経緯が簡潔にまとめられている。この発音論争は2011年から存在したことがわかるが、くまモンが誕生した直後からアクセントの問題があったことがわかる。起伏式アクセント、平板式アクセントを主張する両陣営とも何らかの根拠を求めていることがわかる。起伏式アクセント擁護者は使用例や聞き取りやすさ、名付け親の意見を重視し、平板式アクセント擁護者は語源、短縮語、類語や熊本方言を重視している。実際には、一個人においても両方のアクセントが見られることもあることから、全国レベルで近いうちにどちらか一方のアクセントに落ち着くことはむずかしいと思われる。

(14) にあるNHK熊本放送局によれば、取材をすると起伏式アクセントが多いということだが、一方、前節で見たように、起伏式アクセントに違和感を覚え平板式アクセントを好む視聴者もいる。したがって、少なくとも熊本県内において「くまモン」がどのように発音されるか、それなりの規模の調査が必要だと思われる³⁰。

テレビやラジオの放送では音声言語が基盤となり、放送局には正しい日本語、美しい日本語が求められる（と多くの人考える）。一方で、若年層を中心とした発音・アクセントの変化の速度は目覚ましく、『NHK日本語アクセント辞典』に収められている平山（1998）の解説によれば「若年層（20歳代～30歳代）の発音・アクセントは、その言語形成期において、テレビなどマスメディアの影響を強く受け、さらに社会の複雑な感化をいろいろと受けたものが多く、従来見られた伝統的・内的変化の場合と異なる外的影響力が大きい」と、その一方で、「若年層の共通語化には個人差が見られ、現段階でその発音・アクセントを一つだけ掲載することは困難」であると記され

30 テレビに苦情の電話をかけたり新聞に投書したりする人が必ずしも多数派とは限らないので注意が必要である。また、そうした行為をする人の特徴がどういったものであるか調べてみると面白いだろう。

ている。そうした発音・アクセントの激動期の中、特にテレビ・ラジオのマスメディアはどのように言葉に対応していけばよいのだろうか。

「ら抜き言葉」など、かつては正しくないと言われたものが一般的になっており、言語が変化する生き物であるということを私たちは実感している。「くまモン」の発音についてはさまざまな要因が絡んでいると考えられるが、まずは実態を把握することが必要であろう。そして、一方言内でも複数のアクセントパターンが存在するのか、方言による違いはどのようなものなのかを探っていく必要がある。平板式アクセントであれ、起伏式アクセントであれ、「くまモン」のアクセントパターンを放送局が統一するというのは実態と必ずしも一致するものではないように思われる。そして、私たち日本語の使い手としても今までとは少し考え方を変える必要があるかもしれない。言語の用法などについてすべてに唯一の答えがあるわけではなく多様性があること、言語は変化するものであり方言差も存在すること、そうしたことを内省し、言語とは不思議な存在であること、そうしたことを今まで以上に私たちは認識すべきではないだろうか。

4. 教育学的考察

アクセントの習得は日本語を学ぶ外国人にとってむずかしいことの一つである。特に初級学習者においては授業時間の関係もあり、なかなかアクセントの指導ができないというのが教師側からの意見であろう。語彙が少ない学習レベルにおいては、一語一語そのアクセントを覚えていくことは避けられないであろうが、窪蘭（2006）などで複合語のアクセント規則などが読みやすい形で提示されており、中・上級学習者においてはそうした本などを理解することが日本語の読解力をつけるだけでなく日本語の運用に直結させることに繋がる。（そして、それは日本語母語話者にとっても日本語の背後にある規則性を理解する機会を得ることになる。）

日本語においてアクセントは重要だが、その一方で、3モーラ語と4モーラ語を中心にアクセントの平板化が進んでいるのも事実である。言い換えると、起伏式アクセントを使わずに語であることがわかるようになっているということだが、これは1モーラ1モーラがわかるようにきちんと発音しなければならないということでもある。したがって、従来から言われてきたことであるが、長音・促音・撥音といった日本語らしい音を日本語学習者は身につける必要がある。

5. 全体のまとめ

本稿は「くまモンのアクセント騒動」に端を発する「くまモン」のアク

セントについて論じた。まず、言語理論においてどのように起伏式アクセントが決められるか概観し、「くまモン」を外來語に準ずると考えた場合、その起伏式アクセントが「くゝまモン」となることを確認した。次に「くまモン」を複合語として分析した場合、「熊本者」と同列に考える場合と「モン」を「ちゃん、くん、さん」などのように考える場合があることを見た。そして、前者であれば「くまモン」は平板式アクセントになる可能性が高く、後者であれば起伏式アクセントになる可能性が高いことを示した。そして、言語実態を調査すると、起伏式アクセントで発音する話者が多いことがわかった。そうした調査は今後、広範囲で大規模な形で行なわれるべきだと考えられるが、熊本県在住者の多くが起伏式アクセントで発音するということが事実であれば、熊本県では「くまモン」を平板式アクセントで発音するのが普通だとは主張できず、そうした主張をする者は根拠となる事実を提示する必要がある。さらに実態調査などでわかったことは、一個人の中においても「くまモン」のアクセントパターンが一定していないことがあるということである。これが単純に不安定なのか、それとも何らかの(言語)環境が影響するのかについては調べる必要がある。ここから見えてくるのは、「くまモン」のアクセント問題は方言の問題だけでなく、共通語とされる東京方言のアクセントの問題でもあるということである。「くまモン」のアクセントパターンについては近い将来、平板式アクセントが増えていくと主張する者もあり、それが正しいのかを今後見守っていくことが大切である。

「くまモン」のアクセント問題はテレビ局間の対立・抗争とも解釈できるが、報道機関である以上、自らの主張を前面に出した結果ありきの態度ではなく、事実が何であるかを正確に伝える必要がある。バラエティ番組に文句を言うつもりはないが、表面的に見ると「くまモン」を熊本では平板式アクセントで発音し、東京では起伏式アクセントで発音していると単純化してとらえてしまう恐れがあるが、それは必ずしも事実ではない。確かに、各地の方言に目を向けるという点では評価できるが、それがステレオタイプを押し付けるようになってはいけないと思う。

最後に外国人に向けた日本語教育におけるアクセントについて簡単に触れたが、改めて日本語のアクセントのむずかしさを認識させられた。しかし、一方で近年のアクセント研究は日本語のアクセントの背後で働く原理・原則を明らかにしており、これからはそうした知識を少なくとも日本語教育者側が蓄えておく必要があると考える。

【付記】

本稿の執筆にあたり、中村嗣郎氏より多くのコメントやご助言をいただきました。この場を借りて御礼を申し上げます。また、くまモンのアクセントに関する調査においては多くの方からご協力をいただきました。合わせて感謝申し上げます。

【参考文献】

- 井上史雄（1998）『日本語ウォッチング』岩波書店。
- 儀利古幹雄（2006）「日本語における撥音の不可視性—医学用語における平板型アクセントの分析—」『音声研究』10.2, 61-71.
- 儀利古幹雄（2009）『日本語における語認識と平板型アクセント』神戸大学博士論文。
- 儀利古幹雄（2011）「東京方言におけるアクセントの平板化—外来語複合名詞アクセントの記述—」『国立国語研究所論集』1, 1-19.
- 窪菌晴夫（2006）『アクセントの法則』岩波書店。
- 窪菌晴夫（2008）『ネーミングの言語学：ハリー・ポッターからドラゴンボールまで』開拓社。
- 窪菌晴夫（2011）「日本語の促音とアクセント」『国語研プロジェクトレビュー』6, 3-15.
- 熊本県庁チームくまモン（2013）『くまモンの秘密 地方公務員集団が起こしたサプライズ』幻冬舎。
- 坂口 至（2001）「熊本市の二型アクセント」『語文研究』92, 39-48. 九州大学国語国文学会。
- 田中真一（2008）『リズム・アクセントの「ゆれ」と音韻・形態構造』くろしお出版。
- 平山輝夫（1998）「全日本の発音とアクセント」『NHK 日本語アクセント辞典』巻末 123-173.

【アクセント辞典】

- 金田一春彦（監修）・秋永一枝（編）（2001）『新明解 日本語アクセント辞典』三省堂。
- 金田一春彦（監修）・秋永一枝（編）（2014）『新明解 日本語アクセント辞典 第2版』三省堂。
- 日本放送協会（編）（1985）『日本語 発音アクセント辞典 改訂新版』日本放送出版協会。
- 日本放送協会（NHK 放送文化研究所）（編）（1998）『NHK 日本語 発音アクセント辞典 新版』日本放送出版協会。